

Nara National Museum

奈良国立博物館

だより

第44号

平成15年 1・2・3月



国宝 十一面觀音像(部分) 当館蔵

平常展

佛教美術の名品
1月4日(土)～
本館

特別展
観

新春国宝展
1月4日(土)～2月9日(日)
東新館

特別
陳列

お水取り
2月18日(火)～3月23日(日)
東新館南側

新春國宝展



国宝 誕生釈迦如来立像 東大寺藏



国宝 信貴山縁起絵巻〈飛倉の巻〉(部分) 朝護孫子寺藏

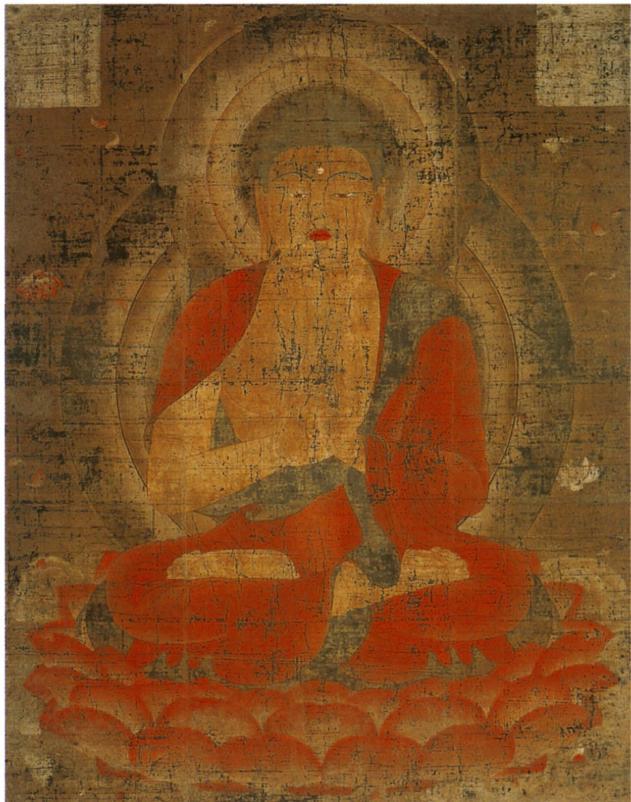
一月四日(土)～一月九日(日) 東新館

飛鳥時代以来のわが国の美術は、仏教や神祇への信仰を多かれ少なかれ製作背景にもつてていると言つても過言ではありません。信仰は、すぐれて美しい作品を各時代にわかつて生み出しています。奈良国立博物館は、仏教美術を中心にして収集・保管・展示・調査研究をおこなう博物館ですが、近隣の社寺をはじめとする所蔵者の方々から多くの寄託品をお預かりし、これに館蔵品の文化財をあわせて、充実したコレクションを有しています。このうちには国宝に指定されたわが国の至宝と言るべき作品もあります。

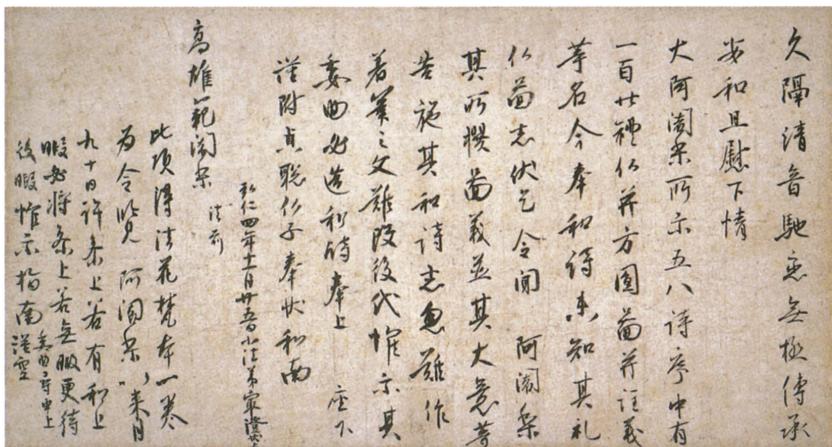
この新春は、当館に収蔵される国宝のうちから二十九件の作品を、東新館に陳列いたします。奈良時代の刺繡釈迦如來說法図(勧修寺旧蔵)がひさびさの展示となるほか、牛皮華鬘(東寺旧蔵)が十三面すべて展示されます。またわが国の平安仏教を方向付けた、空海、最澄、円珍といった人たちの自筆の筆跡も出品されます。熊野速玉大社所蔵の桐蒔絵手箱に表された室町時代の美しい蒔絵も見のがせません。このまたとない機会に是非当館におこし下さい。



国宝 刺繡釈迦如來說法圖(部分) 当館藏



国宝 阿彌陀如來像(阿彌陀三尊および童子像のうち) 法華寺藏



国宝 伝教大師筆尺牘〈久隔帖〉 当館藏



国宝 桐蒔絵手箱 熊野速玉大社藏



国宝 銀製鍍金狩獵文小壺(東大寺金銅鎮壇具のうち) 東大寺藏

第五十四回正倉院展を観て

閔丙贊（ミン・ピヨンチャン）
(韓国・国立中央博物館学芸研究官)

「外からみる奈良博」

正倉院。韓国でも、関連分野の研究者だけでなく、歴史に関心を持つ一般人もがよく知る名である。また毎年一度、奈良国立博物館で所蔵品が一般公開される「正倉院展」もよく知られており、関心のある人なら誰もが一度はその目で観てみたい展示である。

私が初めて「正倉院展」を観たのは、今から四年前、一九九八年のことである。以前から観覧への思いは切実にあつたが、一年に一度、しかもたつた二週間足らずという展示期間に日程を合わせるのはたやすくなかつた。幸い一九八八年は、しばしの日本滞在中に偶然期間が重なり、期待に胸を躍らせ、東京から不遠千里で駆けつけた。展示会場は多くの人で混み合い、あちこちから「素晴らしい」という歓喜の声が漏れていた。だが、私の心にまず浮かんだのは、失望の念だつた。遺物に近寄ることも、じつくりと観察することもできない環境もさうだが、何よりも展示が、私の期待とは大分違つていたためである。

私は、正倉院の遺物は当時の最高級品であり、展示品はすべて名品一色だと期待していた。ところが、その名品の横にはその包みが、またその横にはそれを縛るひもが、さらにその横にはそれらを入れる箱が、順に並べられていた。結局、会場全体で名品と言えるのは三分の一ほどで、残りは保管用の箱や包装材だつた。それゆえ私にとって、感嘆する日本の観覧客は、皇室の宝物を実見したこと、単なる観覧という次元を超えて敬拜する人々のようにならなかった。

数日後、偶然知りあつた大学生との対話で正倉院展がしばし話題になり、展示について尋ねてみた。彼は、展示は非常に素晴らしいと感動したと言つた。何に感動したのかと聞くと、彼は一言「高校の歴史で学んだ宝物を直接観ることができ、感激した」と言つた。年配の人々には敬拜の対象、若者には教科書で見たものの実見、私にはそう受け止められたのだった。そんな訳で、正倉院展とは日本人のためのイベントに過ぎず、外国人にはそれほど

意味ある展示ではない、と認識するようになった。その後は縁あつて毎年観覧できたが、それほどの感興は湧かなかつた。

そんな折、今年は新羅関連の展示が多いと聞き関心を寄せていたが、短い展示日程との折り合いがつかずあきらめていた矢先、偶然に機会が訪れ、展示の最終日だった十一月十一日に観覧することができた。

混み合う人波や展示方法など、全体の雰囲気は以前とさほど変わらなかつたが、最初からきちんと観ようと思いつき、細やかな説明文を読みつつ観覧するさなか、「佐波理匙」が目に飛び込んでいた。自然と、何かが胸にぐつと込みあがってきた。新羅からの輸入品で、匙の間には、新羅の文書が今も包装紙代わりに巻かれていた。自然と、何かが胸にぐつと込みあがってきた。その少し向こうには「佐波理加盤」と、それを包んだ「新羅文書」が置かれていた。黄褐色の楮紙に墨線が引かれ漢文が書かれていたが、大変鮮明で、肉眼でも十分判読できた。「おお…」知らず知らずのうちに、感嘆の声が漏れた。

記録の少なさゆえ、よく分からぬことが多い新羅史。そんな中、地方支配構造や村落の具体像、民の生活を明らかにする稀有の資料「新羅村落文書」が発見された時の思いが、正にこうしたものではなかつたか。また高校時代、私が国史の教科書で懸命に暗記した内容の原本がここにあるのに、どうして感歎せずにいられようか。今回の展示を観ながら、これまで抱いてきた疑念が、自然と解かれていた。

宝物だけでなく、その包みや箱を展示することの大切さ。そして幼い学生から年配の人々までが上げる感嘆の声。私もまた、そうした観覧客と同じ人となり、展示に見入つていた。ナショナリズムとコスモボリタニズムが、二つではなく一つになり得ることを、あらためて悟つた。

今後、正倉院の遺物は当時の日本の国際性を超えて、さらに多くの世界人の目に触れていくだろう。韓国に限らず、コスモボリタニズムを満たす正倉院展がさらに増えるよう、願つてやまない。



第54回正倉院展 入口

教育普及事業とボランティア活動の連携

—「博物館」を魅力ある場所に—

奈良国立博物館教育室長 宮田 康和

発足以来6年目を迎えた奈良国立博物館（以下奈良博といふ）解説ボランティア（以下ボランティアといふ）は、登録者数も年々増加し、その活動も充実深化してきている。この間、各方面から一定の評価も得ることができ、奈良博に欠くことのできない存在となっている。

（1）作品解説

平常展・特別展・特別陳列の展示会場での解説がボランティア活動の中心をなしている。平成14年度には、「大仏開眼1250年東大寺のすべて」「観音のみ寺石山寺」「西大寺古絵図は語る」「第54回正倉院展」「一遍聖絵」などの作品解説を実施した。「東大寺のすべて」や「正倉院展」では、ボランティアが講堂において出陳宝物を約30～40分ほどにまとめて、丁寧にわかりやすく解説を行った。1日に4回、会期中に「東大寺のすべて」では延べ100回、「正倉院展」では延べ70回ほど実施することができた。



いずれの場合にも、特に奈良市内の小学生に聞いてもらう機会があった。解説を担当したボランティアは、東大寺や正倉院の宝物を理解してもらうために、名称、技法、用途などをわかりやすい言葉で表現したり、歴史の授業と関連付けて説明したりするなど、話し方も含めて工夫をしてもらった。

解説終了時のアンケートの回答には、「時代背景や宝物の特徴、見所がよく理解でき、見学の参考になる」「内容が興味深く感激した。これからも頑張ってほしい」など、感謝や激励の声を多くいただいた。ボランティアの日ごろの地道な努力が、こういった評価につながったものといえる。

また、子どもたちの自主的な作品鑑賞に役立つように、本館には「やさしい仏像の見分け方」を、展覧会ごとに「クイズにレッツチャレンジ!!」のワークシートを会場に置いている。疑問点があればボランティアにたずねることもでき、解説の際にもこれらを活用している。特に「やさしい仏像の見分け方」は、仏像の特徴がわかりやすく簡単にまとめられており、大人の見学者にも喜ばれている。

（2）「親と子の文化財教室」の支援

5月から12月まで、各月の第2土曜日にこれを実施している。今年度は「奈良時代の歴史と美術」のテーマで、わかりやすく楽しく歴史と文化を学ぶことができた。ボランティアの支援は、会場

準備や受付・案内、機器の補助等の手伝いが中心である。この教室は、基本的に学芸員が講師を務めるが、6月実施の「東大寺のすべて」「天平衣装を着てみよう」では、ボランティアが講師を担当し、スライドや資料の準備、また奈良時代の衣装研究や衣服の試作品を制作した。

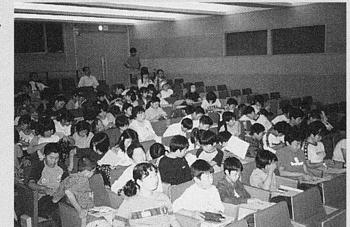


子どもの目線に立った興味深い内容と、天平貴族の衣装体験、ミニファッションショーは大いに楽しめるものであった。ボランティア個々の得意分野や能力が発揮されたといえ、その熱心な取組には頭の下がる思いである。

（3）学習普及活動

小・中・高校生の団体・小グループでの入場が多いのも奈良博の特徴である。その際、学校側と活動の在り方などについて、事前打ち合わせの機会を持つことが望まれる。また学校においては、博物館見学の目的意識や調べ方、公共マナーなどの事前学習がなされることが大事である。奈良博（教育室）と学校との連携を図りながら、子どもたちの「総合的な学習」やグループ活動に対する有効な支援を実施している。今年に入って、そうした問い合わせが相次いでいるのは、有り難いことである。

具体的には教育室やボランティアが展示作品の解説を行ったり、学習コーナー・図書コーナーを活用しながら情報提供したり、質問などの相談にも対応することができる。また団体の場合、講堂や学習室で「ぶつぞう入門」や「奈良の社寺と仏像」のコンピュータ画像を使って、ボランティアがエピソードをまじえながらわかりやすく解説している。最近実施した、仏像の理解を助ける「四種類の仏像衣装体験」の学習も、子どもたちには大好評であり、生き生きとした表情が印象的であった。



奈良博が古都奈良の文化財に関する学習の拠点となる活動を、今後とも積極的に推進していきたい。その原動力となるのが117名のボランティアであり、これからの一層の精進と活躍を期待するところである。

●ギャラリートーク●

1月 8日（水）「新春国宝展より—国宝の工芸について—」研究員 伊東 哲夫
2月12日（水）「中国古代青銅器—坂本コレクションより—」

仏教美術資料研究センター長 井口 喜晴

3月12日（水）「お水取りと涅槃図」
研究員 谷口 耕生
※いずれも14時から、展示室にて。入館者の聴講自由。

●ボランティアによる解説●

ボランティアによる解説を、開館日の10:00～13:00、13:30～16:30の時間帯に展示室でおこなっています。20名以上の団体の場合は、事前にご相談のうえ、ご予約をお願いします。

ご予約・お問い合わせ先：教育室 宮田（電話0742-22-7008）

●展覧会日程●

	1月	2月	3月
本館	平常展(1/4～)		
西新館		休館	
東新館	新春国宝展(1/4～2/9)	お水取り(2/18～3/23) 平常展(2/11～3/23)	休館(3/24～)

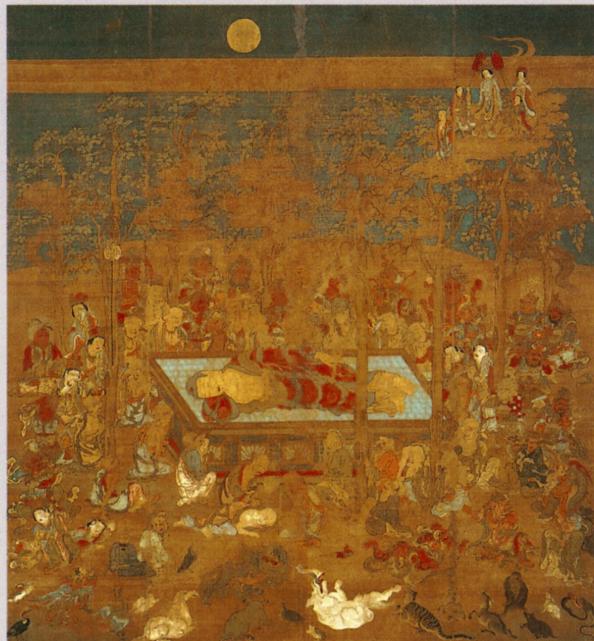
展示品の見どころ

仏涅槃図

重要文化財
絹本着色 180.3×164.8 鎌倉時代
兵庫・浄土寺蔵

仏教の開祖である釈迦がインド・クシナガラの跋提河のほとり、沙羅双樹のもとで入滅したのは、二月十五日の満月の夜のことであった。釈迦の死は究極のさとりの姿として、特に涅槃と呼ばれる。その涅槃の情景を絵画化した涅槃図は、釈迦の命日すなわち毎年二月十五日に行われる涅槃会の本尊とされ、日本全国の仏教寺院に伝わっている。

ここに紹介する浄土寺本は、数ある涅槃図の中でも彩色の美しい優品として知られており、鎌倉時代後期に制作されたものと考えられる。正方形に近い画面のほぼ中央、八本の沙羅双樹に囲まれる宝台の上に、釈迦が右手を手枕にして頭を北、顔を西に向ける「頭北面西」の姿で横たわる。その周りを取り囲む菩薩や仏弟子、八部衆、四天王、象や獅子などの動物を含む会衆たちが、それぞれ顔を押さえたりひっくり返ったりして泣き叫びながら釈迦の死を悼んでいる。また、画面向かって右上には、釈迦の母である摩耶夫人が、仏弟子の阿那律に先導されながら雲に乗って駆けつけると



ころが描かれている。

ところで、日本において涅槃図を本尊として行われる涅槃会は、その季節がら春を迎える年中行事としても親しまれてきた。奈良に春をつげる行事として多くの人でぎわう東大寺の修二会（お水取り）でも、その最後を締めくくる行事として三月十五日（旧暦の二月十五日）に涅槃講が行われている。今回、浄土寺本など涅槃図がまとめて展示される当館東新館では、二月十八日（火）から三月二十三日（日）まで「お水取り展」を併せて開催する。ぜひこの機会に涅槃会と修二会という伝統ある春迎えの行事の魅力の一端をあじわっていただきたい。

（企画室研究員 谷口 耕生）

■開館時間 9時30分～17時、1月12日（日）、3月12日（水）は19時まで
※いずれも入館は閉館の30分前まで

■休館日 月曜日（ただし1月13日（月・祝）は開館、1月14日（火）閉館。）

■観覧料金

	大人	大学・高校生
平 常 展	一般 420円	130円
団 体	210円	70円

*団体は責任者が引率する20名以上。



〔交通案内〕近鉄奈良駅から徒歩15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅からバスで「氷室神社・国立博物館」下車すぐ

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒（90円切手貼付、宛名明記）を同封して、当館の企画室にお申し込みください。

 奈良国立博物館
Nara National Museum